日本経済新聞（夕刊）　2021年（令和3年）8月19日（木曜日）

障害有無超え 同じ艇で戦う

ボート混合、視覚障害・肢体不自由・健常者…

東京パラリンピックのボート混合かじ付きフォアは、さまざまな障害がある選手と健常者の選手が男女で一緒の艇に乗る。境遇の異なる人々が手を携えて暮らす共生社会を体現するかのような種目だ。日本チームの有安諒平選手（34）は「私たちが目指す社会のヒントになる」とアピールする。

障害者ボート世界選手権の混合かじ付きフォアに出場した有安選手（左から2人目）ら（2019年、オーストリア・リンツ）＝共同

「不得意補う」共生のヒント

Tokyo

チームはこぎ手4人と、司令塔役の舵手の計5人で構成され、2000㍍の直線でタイムを競う。

日本は舵手の立田寛之選手（29）が健常者で、こぎ手の有安選手と木村由選手（17）は視覚に、西岡利拡選手（49）は左手に、八尾陽夏選手（24）は右半身にそれぞれ障害がある。木村選手と西岡選手の年齢差は32歳だ。

有安選手によると、他国には義足のメンバーがいたり、こぎ手全員が腕や足に障害があったりするケースも。「特性が大きく異なる選手をどうやって一つにするのかがこの競技の面白さ」と語る。

方法はさまざま。日本チームの場合、不自由な手でもオールを操りやすいよう、持ち手を改造するといった道具の工夫に取り組んだ。全員のこぎ終わるタイミングを合わせて推進力を高めるため、片腕を使う選手と両腕の選手にずれが生じないよう調整した。

有安選手は中学3年で指定難病の黄斑ジストロフィーと診断され、今は人影や色がなんとか認識できる程度。柔道経験者としてのパワーを生かしてエンジン役を担う一方、周囲の様子は目が見える選手から伝えてもらう。「不得意をカバーし合っていると説明する。

立田選手は高校時代から舵手一筋で、健常者の日本代表に選ばれたことがある。人脈を生かして健常者チームと交渉し、パラの選手を練習に交ぜてもらうことも。「壁を取り払うのは僕がやらなきゃいけない」と意気込む。

新型コロナウイルスの影響で大会延期が決まると、こぎ手の一人が辞退し、一時は予選参加さえ危ぶまれた。それでも、立田選手は勤めていた広告代理店を退職し、このチームでの大会出場に全てをかけた。最年少の木村選手が加わり、再スタートを切ることができた。

今年6月の世界最終予選で出場権は得られず、推薦枠での出場となった。上位陣と力の差はあるが、「金メダルを取りたい」と物おじしない木村選手の言葉で全員が奮起。有安選手は「でこぼこした特性のメンバーがどのようにまとまって戦っているか、感じてもらえたらうれしい」と期待した。

▼混合かじ付きフォア　パラリンピックのボート種目の一つ。それぞれ1本のオールを操る男女2人ずつのこぎ手と、コックスと呼ばれる指示役の舵手1人の計5人からなる。こぎ手は視覚障害か肢体不自由が条件で、視覚障害の選手はチームに最大2人まで。舵手は健常者が務めることもできる。パラのボート種目は他に、1人乗りのシングルスカルと男女1人ずつが乗る混合ダブルスカルがあり、どちらも1人で2本のオールを操る。